ウィスコンシン大学拡張の同時代史

小池源吾

はじめに

ある学問がひとつの専門分野として市民権を獲得するには、知的アイデンティティ（cognitive identity）と専門的アイデンティティ（professional identity）が必要だと言われる。[1] それには、まず研究の対象や方法、成果についての合意形成はもとより、学問的な価値の承認、さらにはその制度的認知が欠かせない。

ひとつの学問が生成、成立する過程に似て、新奇なスキームがやがてプロトタイプとして社会的な影響力をもつようになるには、やはりその独自性や固有の価値について承認と制度的認知を獲得する必要がある。もっとも、その具体的な方法は、学問の場合とはいささか異なる。すなわち学問の場合、学会という場を拠り所にして地歩を固めていくことができるのにひきかえ、後者の場合には、そうした特定の足場をもたない。それゆえ、広く人口に膾炙し、耳目を引くことを通じて、社会的に認知されていくのを常態とする。まさにその過程で重要な役割を果たすのが、第三者による論評であり、言説なのである。

これを、ウィスコンシン大学拡張に引きつけて考えると、大学拡張が復活を果たすのが一九〇六年であるから、時期的には、それを起点とし、ウィスコンシン大学が音頭をとって全米大学拡張協会（National University Extension Association）が結成をみる一九一五年までのおよそ一〇年間に発表された所論をひとまず視野におさめる必要がある。[2]

その際、影響力という点では、いうまでもなく論者の知名度は重要である。さらに、論稿の長短など発表の形式や、どこに発表したかなども無視できない。これら諸点に照らして検討していくと、ひとまず三本の論稿が考察の対象となる。[3]

第一は、著述家のハード（Hard, William, 1878–1962）[4]が執筆し、『Outlook』誌の八六号（一九〇七年七月二一日）に掲載された「A University in Public Life」と題する評論、第二は、やはり編集者として知られるステファンズ（Steffens, Lincoln, 1866–1936）[5]が、一九〇九年二月の『American Magazine』誌（六七号）のために書き下ろした「Sending

the State to College」、第三は、作家でありジャーナリストでもあったストックブリッジ（Stockbridge, Frank Parker, 1870–1940）[6]が『The World's Work』誌の二五号（一九一三年四月）に発表した論考「A University That Runs A State」である。雑誌に掲載されたこれらの論考とは別に、もうひとつ、編集者スロッソン（Slosson, Edwin E., 1865–1929）[7]が物した『Great American Universities』（一九一〇年）がある。同書は、二十世紀初頭のアメリカにおける主要な一四大学を個別に取り上げ、それぞれの特徴を論じた点で、他に類をみない大学論となっている。[8]ウィスコンシン大学には、第七章が充てられている。そのため、往時の主要大学との比較を通して、ウィスコンシン大学がいかなる位置を占めていたかを理解するのには、このうえなく好都合である。とはいえ、もともと大学拡張を主題にして論じたものではないので、今回の分析対象からははずした。

したがって、本稿では、ハード、ステファンズ、ストックブリッジの三人を取りあげ、それぞれが、ウィスコンシン大学で復活をみた大学拡張のどこに注目していたのか、言い換えるとウィスコンシン大学拡張が同時代人にどのように映じていたのかを考察する。その意味では、これは、外からみたもうひとつのウィスコンシン大学拡張史と言うことができようし、また、ウィスコンシン大学拡張を広く知らしめるうえで彼らの言説が果たした役割からすれば、なぜウィスコンシン大学拡張がアメリカ型大学拡張のひとつの範型となりえたのか、その間の消息を解明するための一助ともなるはずである。

一．W・ハード著「A University in Public Life」（一九〇七年）

『Outlook』誌の八六号は、六五八頁から六六七頁までをハードの評論に割いている。そこには、ウィスコンシン大学の遠景、農学・畜産学部の校舎、家畜小屋、州議会議事堂や、大学関係者では、バンハイス学長をはじめ、幾人かの重要人物を撮影した八葉の写真も掲載されていて、ウィスコンシン大学の往時を彷彿させる。

ハードは、冒頭でウィスコンシン大学の印象を語り、わずか一頁足らずの文章で「strange place」という言葉を三回も繰り返して、同大学が「一風変わっている」ことを強調している。

たとえば、州都マディソンは、風光明媚な二つの湖の間に広がる丘陵地帯に位置する。まるで中部イングランドに居るがごとき錯覚に陥る。それでいて、マディソンは、いまや革新主義（progressive）の実験室（experimenntal laboratory of America）としてその名をとどろかせつつある。旧世界のたたずまい（its Old World look）と、同市が取り組む実験の現代性は、ハードの眼には、なんとも両立しがたい光景と映じたようだ。

ハードが感じた違和感は、まだある。周知のごとく、ウィスコンシン州は、五大湖の西に位置し、北方のカナダと国境を接している。合衆国全体からみると、ウィスコンシンは、明らかに周縁部に位置する。だが、こう綴ったとき、ハードは、バブコック（Babcock, Stephen M.）教授による研究成果を脳裏に思い浮かべていた。ミルクに含まれる脂肪含有量の測定法が、乳製品の開発や酪農の振興という面でいかに多大な影響力をもったかに思いを巡らしていた。たとえ地理的には辺境にありながらも、世界への貢献という面では揺るぎない地位を築いてきたウィスコンシンの二面性もまたハードの好奇心を大いに刺激した。

このように、ハードをして「strange place」と言わしめた理由をさぐっていくと、予想や常識の範囲を超え、あるいはそれらを覆す、言ってみれば「らしからぬ」現実に逢着する。その意味において、彼をもっとも「当惑させた（disconcerting）」[9]のは、「大学らしからぬ」ウィスコンシン大学の様態であった。だからこそ、彼は、「民衆の暮らしのなかの大学（A University in Public Life）」を標題に掲げ、大学と州議会議事堂をかけもちして活動する教師たちの生態を広く世に知らしめようとしたのである。

「大学人らしからぬ」大学人として、彼が筆頭にあげた人物にマッカーシー（McCarthy, Charles）がいる。現職は、政治学の講師にして、哲学博士。あまたの候補を退け、ジャスティン・ウィンザー歴史賞の受賞者と紹介した後、マッカーシーの活躍ぶりを次のように続ける。[10]

マッカーシー博士には、活動の舞台が二つある。ひとつは、大学。もうひとつは、州会議事堂である。大学では政治学（political science）の発展に、また、州会議事堂では科学的な政治（scientific politics）に尽力している。

彼が「政治（politics）」にかかわっていると言う表現は、本当は正しくない。マッカーシーは、政治運動に身を投じているわけではないし、選挙に関心をもっているわけでもない。彼は、州議会の立法部の長を務めているだけである。ちなみに、立法部で彼を補佐しているのが、同じく政治学部のマーガレット・シャフナー女史である。いうならば、彼は、州民を代表する公認のロビイストなのである。彼の使命は、あらゆる政策課題に関する可能なかぎりの情報を収集し、議会に提供することにある。その使命を、彼は、特定の党派に与することなく公平に、そして慎み深く、包括的に全うしているのだ。

ここに抜粋した文章の主旨を理解するには、この時期のウィスコンシン州に特有の政治的、社会的状況に思いをいたす必要がある。マッカーシーの活動は、ラフォレット知事の下で展開された革新主義政治と分かちがたく結びついていたからである。旧套を墨守することに余念がなかったそれまでの政治は、腐敗を生ぜしめ、格差の拡大と不平等を助長していた。そのため、革新主義政治の旗手として登場したラフォレット知事は、大胆な政治改革に打って出ることになる。勘と経験をよすがにした政治手法の限界はもはや自明であった。それまでのやり方にかわる、新しい手法が導入されねばならない。そこに、政治学の専門家としての使命を見出したのがマッカーシーにほかならなかった。

「偉大なのは真実、勝利をおさめるのは真実だけである」[11]。いかにもマッカーシーらしい信条を、ハードはこのように紹介している。州議会で俎上にのぼせられた課題については、国内外からありとあらゆる有用な情報を集めて議会に提供するのが、マッカーシーの役割である。そうした情報をもとに、議会は法律を制定する。このように立法の過程を合理的な思考に依拠させることで、社会的公正の実現を図ろうと、彼は考えた。マッカーシーのこうした活動があったればこそ、ウィスコンシン州は、一連の画期的な法律を革新主義政治の成果として全国に誇示することができ

たのである。その仕事ぶりから、「学者の特権を市民の義務と結びあわせた」とハードがマッカーシーを称えたのは、[12]故なきことではない。

もっとも、大学と州会議事堂を二股かけて活躍する大学人はマッカーシーだけではなかった。ハードは、政治経済学部に所属する人間のうち、およそ二〇～三〇人が、州会議事堂に出向いて活躍していると報告している。[13] 税制委員会（Tax Commission）を例にとると、そこには、テイラー（Taylor, William Dana）、ペンス（Pence, W. D）、マック（Mack, J. G. D.）、ソーケルソン（Thorkelson, H. J. B.）といった教授たちの他にも、アダムズ（Adams, Thomas Sewall）助教授、ウィリアムズ（Williams, L. D.）、ヴァン・ザント（Van Zandt, J. D.）といった人物が名前を連ねる。

さらに地質学科では、新進気鋭の講師ホッチキス（Hotchkiss）の活躍が注目される。もともとは古生代の化石を研究する彼だが、いまでは、それに勝るとも劣らぬ情熱を州内の道路整備に注いでいる。畑で収穫した農産物を一番近くの鉄道駅に運送するための経費は、それを鉄道で二〇〇マイル先の市場に出荷するための運賃にも匹敵したといわれる。ホッチキスには、道路網の整備こそ喫緊の課題とみなされた。だから、彼は州内をくまなく探査し、必要なデータを収集する。そうしたデータを大学に持ち帰り、作成した道路整備の計画書は、州議会で付議されることになる。

道路整備がホッチキスなら、アレクサンダー（Alexander, Alexander Septimus）教授は、すぐれた種馬の飼育で知られる。彼の努力によって、法律が制定され、馬の繁殖は厳格に管理されることになった。おかげで、病理的に問題がある増殖や、繁殖をめぐる不適切な慣行はウィスコンシン州から駆逐されたといわれる。

このほかにも、学外で活躍する大学人としては、州政府の林務官に任じられている林学の講師グリフィス（Griffith, Edward Marriam）、州酪農・食糧委員会の委員を務める化学教授フィッシャー（Fischer, Richard）、マディソン市議会議員でもあるターナー（Turneaure）とスミス（Smith, Leonard Sewall）の両教授、マディソン市のガス・電力供給に関する諮問委員を仰せつかっている工学部の講師ウェルズ（Huels）などを列挙することができる。

また、州公務員制度検討委員会で委員長を務めるスパーリング（Sparling, Samuel Edwin）助教授は、政治学の学

理を実際の現場で検証させようと、同委員会に門下生たちを参加させている。このように具体的な事例を引き合いに出しながら、ハードは、ウイスコンシン大学の複数の学部から、しかも、教授のみならず、助教授、講師、大学院生たちまでが学外に出向き、それぞれが有する専門性でもって貢献をしていることを強調するのである。

もはや、大学教師のうちのほんの一握りの人びとの奇特な活動と片づけるわけにはいかない。大学による組織的な取り組みという意味からして、これら一連の構外活動を、ハードは「大学拡張」の「変種（extraordinary spieces）」とみなし、高い評価を与えた。[14]

たとえば、その活動がいかに多彩で広範囲であるか、次のように述べている。[15]

公務員制度検討委員会から種馬まで、種馬から鉄道税制まで、鉄道税制から道路整備まで、大学の影響力はあらゆる方面に及ぶ。ウィスコンシン州を訪れる者は、その新奇な取り組みが州民の生活の隅々まで行き渡っていることに気づき、驚かされるだろう。

とはいえ、利益を享受したのは州民だけではない。それは、ラッセル（Russell, Harry L）教授の構外活動を評したくだり読むと、明らかである。[16] ちなみに、ラッセルは、細菌学を専門とし、大学構内に設立された州立衛生研究所の運営に関わり、また州畜産衛生委員会でも重責を担っていた人物である。

その効用は、まさに一石二鳥と言うべきか。一石三鳥と言ってよいかもしれぬ。ウィスコンシンの人びとは、ラッセルから、理論的な研究者として、あるいは実際的な行政官としてのサービスを獲得するのみならず、ラッセルには、公共の事柄にかかわることによって触発される問題意識やインスピレーションを持たせて、学生たちのもとに送り返しているのである。

ハードは、大学拡張の未来を専門性に依拠した州民へのサービスに見出し、ウィスコンシン大学の州民へのかかわ

り方を〈consulting engineer〉と評している。[17] しかし、ハードの卓見は、それにとどまらず、そうしたサービスが大学における教育と研究の活性化を帰結するような、つまり、大学の社会の新たな関係をも看破していたところにあるといってよいだろう。

二　L・ステファンズ著「Sending the State to College」（一九〇九年）

ウィスコンシン大学の構内を、ガイガーの『フマニスムス』[18]を手に、もう片方の手には先ほど農学部で購入したばかりのチーズをもって、一人の教授がやってくる。同僚とすれちがいざま、自分が両手に持っているものを顎で示しながら、さもおもしろそうに「これが大学だなんて、うまく説明できないよ。」と言う。おそらく東部出身の、ウィスコンシンにやってきて間もない教授にまつわるこのようなエピソードでもって、ステファンズは論文を書きおこしている。[19] そこには、東部の伝統的な大学とはまったく異なるウィスコンシン大学に特有の風土や気風といったものが暗示されている。

この論文を執筆したステファンズの意図は明白である。彼は、ウィスコンシン大学における近時の動向を「知の民主化」と捉え、それが新しい大学観の発露であることを論じようとした。彼によれば、「知の民主化」とは、university expansion と university extension の二つの相をもつ。[20] ここで言うところの expansion とは、学問分野の進展を意味し、後者の extension とは、教育の恩恵を享受しうる者の拡大を指す。したがって論文では、最初に university expansion を取り上げ、次いで university extenion へと論旨は展開していく。しかし、extension については、agricultural extension と general extension に細分して論じているので、この論文は、内容的にも分量的にも大きく三つの部分から成り立っていることになる。

アメリカのカレッジは、オックスブリッジのカウンターパートとして発展した。したがってハーバードでも、エー

ルでも、若い紳士の教育にはリベラルアーツが用いられた。新興の科学は、大学の伝統をそこなうものとして、長い間、拒否しつづけた。やがて、渋々受け入れを認めたときでさえ、カレッジの付属物として位置づけるのが一般的であった。ローレンス・サイエンティフィック・スクールとか、シェフィールド・サイエンティフィック・スクールなど、わざわざ新たな名称を付して親機関との差異化を図ろうとし理由もおのずから理解されよう。

東部のカレッジに倣ったので、西部の大学でも、リベラルアーツはもとより大学教育の中核をなす。しかし、功利主義的で、民主的な西部の土地柄や、個人ではなく、州が大学財政に責任を負うという運営形態は、東部とは異なる大学を成立せしめた。西部の、とくに州立大学では、創設当初より、科学に有利な地位を与え、かつ進歩を助長してきた。

専門職の養成に重責を担ったドイツ大学に傾倒していたといわれるヴァンハイス学長は、研究機能の推進に腐心したことで知られる。しかし、ヴァンハイスの言葉を引用して、ステファンズが言うように、「西部の人びとは、純粋な知識の拡大（expansion）に満足してはいなかった。彼らは、応用可能な知識、つまり、生活や自分たちの需要に即応するような知識を開発し、教授してくれる学部を求めていたからである。[21]」西部の州立大学は、その開学時より、法学部や医学部をはじめ、工学部、農学部を有し、その後も、ビジネスとか商学などの実際的な学部を積極的に増設してきたのは、こうした事情によるところが大きい。

「知の民主化」では、もうひとつ、学問の恩恵をより多くの人びとに届けようとする試みも重要である。extensionについては、ステファンズは、ウィスコンシンにおけるその始源として、農学部が一八八五年に創始したショートコースに着目する。マディソンの郵便局長で、ウィスコンシン政界のボスであったキーズ（Keyes）の発言を引用したくだりは、農学部をめぐる当時の状況を知るうえで、じつに興味深い。[22]

一八五四年に設立された大学は、苦労しながら、絶え間なく成長を続けてきた。だが、成長といっても、高等教育に公費を支出することへの根強い偏見と闘わねばならなかったため、じつにゆっくりとしたものであった。農学

部はあったが、農民たちはそれを軽蔑していた。ロビイストとして活動する、大学評議員の大物でさえ、議会を説得して補助金を獲得するのはけっして容易ではなかった。だから、「たとえ牛馬の糞を靴につけたままやってきたとしても、農民の息子たちを、なんとしてもマディソンに呼び寄せねばならなかった」。

キーズの記憶によれば、ショートコースがはじめて話題に上ったのは、合衆国上院議員の故ヴァイラス（Vilas, Willima F.）の邸宅で催された私的な会合であった。キーズはもちろん、農学部長のヘンリー（Dean Henry）などが同席していたらしい。いずれにしても、農学部に対する農民の理解をうながし、また農民の子弟を勧誘して学生を確保せんがための一手としてショートコースが案出されたことはまちがいない。

ショートコースは、収穫が一段落した晩秋から、春の農耕が始まるまでの農閑期に開講された。準備されたコースには、「飼料と餌の与え方」、「飼育」、「土壌」、「実験室で開発された植物栽培法」、「酪農場」、「穀物」、「農芸化学入門」、「農業簿記」などがある。[23] 学部長みずから広報活動を買って出るなどの甲斐があって、初年度（一八八五－一八八六年）には、一九人の若者がマディソンにやってきて受講登録している。彼らは、大学が所有する牧場や納屋、貯蔵所、実験室での主に実習をとおして、農業に関する科学を教え込まれた。講義もあったが、そこでも、知識の一方的な伝達に終始してはいない。たとえば畜産に関する授業の場合、標本や幻灯を活用しながら、その起源、歴史、種に見合った繁殖法についてひとしきり講義を聴いた後には、家畜小屋に移動して、学習の成果を実地に検証させるなどの工夫が施されていた。

感想文に、受講生の一人は、ショートコースに参加したおかげで「乳牛一頭あたりのバターの生産量は七五ポンドほど増えた」と記している。家畜の世話のしかたを学んだ別の一人は、「家畜は、数で二五％の増加、質では六〇％の向上、そして牧夫の生産高はすくなくとも五〇％上昇した」と言う。「自分の稼ぎが二倍になった」、あるいは「三倍になった」と書いた者もいる。

だが、ショートコースのねらいは、実学を提供して知的な農民を育てることだけではなかった。その点では、「ウィスコンシンの伝統」であり、現に、「ウィスコンシンのスポーツのひとつ」[24]として若者たちが愛好してやまぬディベートを積極的にショートコースに導入したことの意味は大きかった。ショートコースの担当者は、経済学、歴史、社会学の教授たちと周到に教材を準備することで、若い農民たちがそうした学問にふれ、ゲームとして楽しませただけでなく、彼らの関心を現実の政治や政府へと向けさせるのに成功したからである。

ショートコースの受講生は、一〇年後の一八九五年には九〇人に、一九〇五年には三二二人、一九〇七年には三九三人と着実に増加をみている。ある受講生は、このコースに参加して、「最新かつ最善の農業実践に精通したのみならず、学習の方向性や方法が明示されたおかげで、あらゆる植物や動物が研究対象になること、そして、そこから進歩が約束されることを知った。」と、感想文にしたためている。もはやショートコースは、農学部が、農民の歓心を買うための方便ではなかった。農民に実益をもたらすためだけの装置であったならば、「賢い農民」とともに「賢い選挙民」などといった文言が多用されることはなかったはずだ。とすれば、ショートコースは、「知的な農民」の育成にとどまらず、当初から、「知的な市民」の育成をも射程におさめていたと考えるべきであろう。筆者のステファンズは、その後、バブコックをはじめとする農学や、ラッセルの細菌学に論及し、そうした成果を農民たちの戸口までもたらすうえで、重要な役割を担うことになるファーマーズ・インスティチュートにかなりの紙幅を割いている。たしかに、大学と農民を繋ぎ、農民のニーズに即応した教育事業を提供する独特のしくみを創出したことや、ステファンズが言うように、[25]若者との相違に着目し、成人に合致した教育実践に端緒をひらいたことなど、アメリカ成人教育史におけるファーマーズ・インスティチュートの意味ははかりしれないものがある。しかし、ファーマーズ・インスティチュートといえども、誤解を畏れずに言ってしまえば、ショートコースを嚆矢とする農業拡張事業の延長線上に位置し、大学は農民のために何ができるかという壮大な実験スキームの論理的帰結にすぎないのである。

ショートコースとファーマーズ・インスティチュートとの関係は、農業拡張と一般大学拡張との関係に似ている。

州税でもって運営されている以上、大学は、農民のために何ができるかということを自問自答しているだけでよいはずはない。州民のすべての者に何ができるかという問いと、大学は対峙しなくてはならなかった。その間の事情を、ステファンズは、次のように論じる。[26]

農業拡張の発展を振り返りながら、ヴァンハイス学長は言う。「いまや、さらなる発展をめざすべき時がきた。いま、われわれが農民やその妻たち、子どもたちのためにしていることのすべてを、今度は、職工や製造業者、教師、説教者、その他すべての男性や女性、そして子どもたちのためにすべく行動を起こさねばならない」と。

その時、普遍的な大学拡張の理念が成立をみた。大学は、みずからが利するために、収益を上げようというのではない。あるいは、大衆に教養を分与しようという博愛的な気まぐれでもない。民主主義を擁護し、かつ、需要があればすべからく応えようとする思い以外のなにものでもない。ヴァンハイスが回想して言うには、普遍的な大学拡張をひとたび着想すると、あとはその理念をどのようにして具現するかだけであった。

実際、この後、ウィスコンシンにおける大学拡張事業は多様な展開をみせることになるのだが、ステファンズがこの論文を執筆した時は、大学拡張部（university extension division）が創設されて（一九〇六年）いまだ日も浅かった。おそらくそのためであろう、今後の展開には大きな期待を表明してはいるが、ステファンズ自身、評価を下すには、いささか時期尚早と考えていたふしがある。それでも、論文を読むと、ステファンズは、この時点で二種類の事業に注目していたことがわかる。そのうちのひとつが、通信教育である。

需要があればすべからく応えることを高唱したヴァンハイスが、まず着目したのは、私立通信学校の繁栄であった。ウィスコンシン州だけでも、そうした通信学校に数千人が学生が登録していた。そして学校は、需要があれば、郵便によってほとんどなんでも教えた。マッカーシの調査結果をみて、大学ならば、もっと良いものを提供できると、ヴァンハイスは確信していた。

だが、その計画を理事会に諮ったとき、理事たちは、おおいに訝り、一体誰が受講するのかと疑義を呈したといわれる。しかし、ヴァンハイスは、法学部と医学部の例を挙げ、かつてそれらは私立の学校であったこと、需要があることがはっきりした段階で、州はそれらを引き取り、大学教育に包摂したことを引き合いに出して反論している。彼にそこまでの行動をとらせた思いを、ステファンズは、ヴァンハイスの言を引用して、次のように説明する。[27]

われわれは、大学をして、州内のすべての人びとに手をさしのべさせたいのだ。

・・・（中略）・・・知識、訓練、実験のためにわれわれが有している資源を万人に供するべきではないというのは理屈に合わない。われわれは、いまや、国の天然資源の保護について考えはじめている。それなのに、なぜ人的資源の保護には無頓着なのか。人的資源の保護は、最高の能力を発見し、そしてそれを開花させるための機会を万人に平等に保障することによってはじめて可能になる。そうすれば、特別な才能を州のために確保することができる。押し黙った、無名のミルトンたちをウィスコンシンの墓地に葬ってはならないのだ。

通信による拡張事業を実施するにあたっては、農業拡張のやり方を踏襲し、大学教師が率先して、工場、労働組合、討論グループ、各種の協会、婦人クラブや農民クラブに働きかけ、広報活動と勧誘を行っている。また、工場主と協議の上、職場でクラスを組織し、そこに大学教師が出向いてスクーリングを実施するなどの措置を講じたことは、通信による教育の限界を克服する上でおおいに功を奏した。

大学拡張部は、一九〇八年九月時点で一二〇〇名の学生を擁している。[28] 学生の顔ぶれをみると、労働者、徒弟、熟練工、セールスマン、事務、出張販売者、商人、教師、婦人クラブ会員、法律家、聖職者、医者、公務員などが含まれる。そのうち、三三〇人は、学位の取得をめざして、（通信により）〝正規の大学教育〟を受けている。最大のグループをなす六六〇人は「特別な職業教育」を受ける人びとである。その内訳を示すと、経理（shop mathematics）二六六人、電気・機械工学一六三人、高速道路建設（道路、排水渠、橋梁づくりを学ぶ農民を含む）一三九人、企業

経営七〇人、製図七五人、高等数学九〇人、古代語一三人、現代語八〇人、自然科学二五人、政治学三二人となっている。まさしくここには、需要があれば、すべからく応えることを標榜したウィスコンシン大学拡張の特徴が反映されている。

ステファンズが注目したもうひとつの事業が、大学教師の州議事堂における活動である。論文を読み進み後段に入ると、「議事堂における奉仕者（A Servant in the House）」とか「官庁で活動する教授たち（Professors in Public Office）」といった小見出しが目につく。大学が有する人的、知的資源を活用したこの種の事業を、ステファンズは、次のように論じている。[29]

ウィスコンシン大学と州民との関係は、人間の頭脳と手、足、目との関係になぞらえられるだろう。すなわちこの大学は、州民が必要とする情報や人材、指導の供給源なのである。州民が大学に対して信頼を寄せているという事実をうけて、州自体が、教授団を頼りにしている。議会は、ヒアリングのためだけでなく、委員として活動してもらうために教授たちを各種委員会に招き入れる。知事や、さまざまな部署の長たちは、相談相手としてだけでなく、教授たちを公職に就かせる。現在、四一人の教授が公職に就いている。何人かの教授は、公職を複数兼務している。たとえば、ヴァンハイス学長は、地質学者および学長として、連邦政府をはじめ、州や市で、五つの要職に就いている。教授たちが兼務する公職の数を合計すると、六六にも達する。

ステファンズは、それぞれの専門性を活かした大学教師の官庁における活躍に敬意を払っている。それでも、マッカーシーの比ではない。すなわち、立法考査室におけるマッカーシーの活動については、「大学による州へのサービスのもっとも顕著な事例」[30]と述べて、とりわけ高い評価を与えているからである。当該分野での先例を世界中から収集し、なおかつ、専門的知見に裏付けられた法案の成立をみんがために、その問題に精通した教授たちに積極的に助言を仰ぐなど、革新的な立法にマッカーシーがいかに大きな貢献を果たしているかを、彼は論じているが、紙幅の都合上、残

念ながら、その詳細は割愛せざるをえない。ただ、ステファンズの言うところにしたがえば、ウィスコンシン州立大学が、新しい大学理念を標榜し、その理念を具現する方途が、農業拡張であり、その精神を継承して発展をみたのが一般大学拡張にほかならなかった。それによって、州立大学が、州民の生活といかに分かちがたく結びつくことになったか、最後に、そのことに言及した一節を抜粋しておこう。[3]

われわれは誰しも、州や大学といえば偉大な制度で、自分たちやそして日常生活とは無縁なものだと考えがちである。ところが、ウィスコンシン州の場合、知的な農民にとって、大学は、養豚舎とか道具小屋と同じくらい近しい存在なのである。大学の実験室は、目先が利く製造業者の施設の一部なのである。労働者にとって、大学は、街角にある学校よりも身近なものとなりつつある。労働組合とかなじみのサロンと同じくらい親しみやすいものなのである。子どもの精神には純正な種を蒔き、若者たちのディベートには純粋な事実を運び込み、選挙民には公平で専門的な知識をもたらすことで、いまや州立大学は、市民の知性にとって不可欠なものとなりつつある。

三、F・P・ストックブリッジ著「A University That Runs A State」（一九一三年）

『The World's Work』の第二五号（一九一三年四月）に掲載された論文に、著者のストックブリッジは、「A University That Runs A State」というタイトルを与えている。そこに使用された「run」を辞書で引くと、他動詞では、「走らせる、動かす」からはじまり、「突き当てる、～の状態にする」、「競馬に出す」、「走って行う、走り抜ける」、「運ぶ」、「経営する、指揮する」、「冒す、～に身命をかける」などの意味が並ぶ。「州に身命をかける大学」と訳せないこともないが、いかにも重苦しい。翻訳するなら、「州を駆けめぐる大学」といったところが妥当なように思われる。

論文は、ウイスコンシン州と州立大学との特異な関係を述べた後、農業拡張、一般大学拡張、市民団体の育成と援助、福祉・情報課（Departmen of Welfare and General Information）の活動、大学教師による州議会への貢献、など

多様な事業を挙げ、ウィスコンシン大学による大学拡張の全貌を紹介している。目的も性格も異なる多様な拡張事業のすべてを視野におさめたところが、この論文の真骨頂と言えようか。ただし、もともと一〇ページにすぎぬところに、ヴァンハイスの肖像をはじめ、トウモロコシの品質鑑定の方法を農民に教えている場面や、バブコックによって開発された脂肪含有量検出法の実習、バターの生産過程で生じる廃物から製造できるようになったチーズ、果樹園における薬剤散布の実演、家畜を品評するショートコースの受講生たち、農学部から遠望した大学本部の風景、など七葉の写真を掲載しているので、本文は、さらに短くなる。しかも、個々の拡張事業に、紙幅を均等に充てているわけではない。たとえば、大学拡張部内の福祉・情報課の事業などは、比較的新しいという事情も相まって、記述内容は、事業の概要を紹介するにとどまっている。すなわち、「いまや、大学は、関心をひろげ、市民団体をも視野におさめてサービスを展開しようとしている」[32]と述べた後、婦人クラブ、文学協会、慈善事業を主とする協会、セッツルメント団体、労働組合、農民クラブ、専門職や実業家の団体など、各種の団体から要望があれば、拡張部は、州立図書館や州議事堂内の立法考査室から、ディベートに供する本、資料を梱包して送り届ける活動とか、学校を、市民の誰もが集い、交流し、学習できる拠点にしようという運動、いわゆる社会・市民センター運動（social and civic center movement）への支援、あるいは、社会調査を実施したり、自治体職員への情報提供を通じて、州内自治体の行政能力の向上を図ろうとする Municipal Reference Bureau の事業などに言及しているが、分量としては三段落、あわせても一ページに満たない。さらに大学教師の兼業、かつてハードがウィスコンシン大学で創始された刮目すべき事業と高い評価を与えた州議会立法考査活動にいたっては、論文の最後でささやかに取りあげられているだけである。しかも、その内容は、一六人の大学教師が、大学と州の双方に奉仕し、双方から給与を得ていること、ほかに一三人の教授が無償で委員会に貢献していること、他方、州の行政職員四人が、州から給料をもらいつつ、大学で教鞭を執っているなどの事実を記しただけで、分量も一段落、わずか一八行を充てているにすぎない。このように、論述のしかたには大きなバラツキがみられる。ここには、ストックブリッジのウィスコンシン大学拡張に対する認識のしかたが反

映されている。そうした観点に立つなら、ストックブリッジが農業拡張と一般大学拡張に多くの紙幅をさいている事実に注目し、そのことの意味にあらためて注意を払う必要がありそうだ。

農業拡張については、それが創始された経緯と現状とを、次のように叙述している。[33]

二八年前、ウィスコンシン大学の農学部は、当時、どこの農学部でもみられたし、いまでも多くの農学部でやっているやり方を行っていた。すなわち、四年制の課程を終えると、次には、農業に関する物理と化学について膨大な量の純理的で科学的な知識をもつ人びとで構成される少人数クラスに出席することになっていた。ただし、そのクラスには、農民は一人もいなかった。地域社会に実際的な恩恵をもたらすことができない以上、議会から、農学部を維持するための財政を確保することは次第に困難になった。そこで、一八八五年になって、大学理事会は、農学部長のヘンリー（Henry, W. A.）教授に対して、農民に実践的な農業教育を提供し、誰の目にも明白にして確実な成果を生み出すような計画を策定するよう要請した。不安を抱きつつも、ヘンリーは、ともかく農業のショートコースを創始することにした。コースは、農業に従事する若者が参加しやすいように農閑期の冬、四ヶ月にわたって開講された。それを二シーズン受講すれば、農業に関する実際的で、科学的な内容をマスターできるようにしようというのが、ヘンリーの計画であった。それは、すぐさまウィスコンシン大学を有名にし、いまなお実施されている。そのクラスに参加する農民の数は年々歳々拡大し、しかも勉学の態度は熱心さの度を増している。四年制課程の横柄な学生たちからは「ショートホーン（短い角をもつ牛）」とあだ名で呼ばれるショートコースの受講生は、毎年五〇〇人を超えるまでになった。いまや、このコースを修了した約四〇〇〇人が、大学で学んだ新しい農業の方法を自分たちの農場に応用している計算になる。

農業拡張事業にまつわるストックブリッジの説明はさらに続く。読み進めていくと、そこでは、農業拡張を実践するにあたってのさまざまな工夫や関係者の努力を紹介しようとした筆者の意図が伝わってくる。

まず筆頭に挙げるべきは、「実践的な教育」である。それに先立っては、農学部の教授団をめぐる変化に言及して

おく必要があるだろう。いまや、農学部は、農業実践と研究の双方に精通した人間、ストックブリッジの言葉を借りると「農民である教授と、教授である農民」で構成されつつあった。実際、農学部長ヘンリーの後任には、実践的な農民で、ウィスコンシン大学の卒業生でもあるラッセル（A. J. Russell）博士が就任している。

彼らが行った教育がいかなるものであったかは、次に引用した文章でもって窺い知れるだろう。[34]

ショートコースの学生は、実験室をつかったり、講義や教室での教育を受けることができた。しかし、彼らにとって本当の授業は、酪農場で行われる。そこでは、大学が所有する純粋種の家畜が、大学付属のバター・チーズ工場に牛乳を供給している。家畜飼育棟では、家畜を判定する方法を実際の体験をとおして学んでいる。農機具棟では、ガソリンエンジンの動かし方や、その取り付けやはずし方、あるいは脱穀機の修理のしかたとか、鍬の直し方までを学ぶ。農業経済学の建物では、種の良し悪しやちがいについて学ぶ。教室での授業といっても、作物の適切なローテーション、農場における建物の効率的な配置、会計学、排水溝の設営など、いずれも農場経営に直結した実際的なことを学習する。

しかしながら、大学教育が、実際的な需要に即応したり、有用性の追求を志向しようとすると、研究の本来的な業務に支障をきたしはしないかと懸念する人びとがかならずやいるものだ。ここ、ウィスコンシン大学の場合もけっして例外ではなかった。とりわけショートコースに好意的でない人たちは、研究活動への影響を危惧していたようである。しかし、ストックブリッジは、ミルクの脂肪含有量の測定法をはじめ、バターに含まれる水分や、凝乳、カゼインの検査法などを例に挙げ、そうした危惧を一蹴する。さらにはバターミルクにも言及して、それまでは、ミルクからバターを採取した残りの液体は廃棄していたのに、さらにそれを再利用して、チーズを製造する方法は、いまや、年間数百万ドルの価値を生み出していると指摘している。いずれも、教授たちが酪農という実践と生産活動に強い関心をもち、積極的にかかわることによってもたらされた成果であった。その意味から、実際的な問題は、研究に支障をきたすどころか、むしろ研究を促進してきたと反論するのである。[35]

とはいえ、もしもこうした教育と研究が農学部内での活動にとどまっていたなら、さほど注目されなかったであろう。言い換えると、農業実践に直結した研究の成果を積極的に学外に運び出し、その恩恵を広く農民に分与するためのさまざまな試みを展開したこと、さらには、そうした活動を有効たらしめるため、大学と農民を繋ぐしくみと、農民教育の方法を編み出すことによって、ウィスコンシン大学は全国から注目されることになったのである。

そのうち、農業拡張として日常的に行われる事業として、ストックブリッジは、種の選別、畜産協会の組織化、バター、チーズ、ミルク、クリームの検査、果樹園における薬剤散布法の実演、湿地に排水設備を設けるための計画作成、土地開墾の実験、ファーマーズ・インスティチュートでの講義を列挙している。

大学と農民を繋ぐしくみという面では、ショートコースの卒業生によって結成された協会（Wisconsin Agricultural Experiment Associataion）が重要な役割を果たしていると、ストックブリッジは指摘する。自分の農場を持ち、しかも穀物の品質改良に意欲を持つからこそ、ショートコースに学んだ人びとは、いまや一五〇〇人に達そうとしている。農学部と濃密な関係を保っている彼らであるから、彼らが相互に連携を保ちながら、かつ、それぞれの地元で農業改善のリーダーとして活躍するなら、州内の農民たちは大学と接触する格好のパイプ役を得たことになる。さらに、州内の随所に大学が設置し運営するセンターは、まさに大学と農民とを取りもつチャンネルとして機能する。センターに常駐する専門員は、当該地域の農業が直面する問題を的確に把握し、大学に蓄積された研究成果に照らしながら、その解決法を農民に提示する役割を担っている。また、精神病院（insane asylums）とか公設救貧院（almshouses）、監獄などの公共機関に付設された実演農場（demonnstration farm）も、農民教育の場となる。大学で開発されたすぐれた農業実践を実物教授する場となる。定期的に行われる教育的な催しには、ファーマーズ・ピクニックと称して、数マイル四方から、農民とその妻、家族たちが車でやってきたわけだから、その影響力たるやなかなかのものである。

それにしても、みずからの経験のみを頑なに信じ、机上の学問や学識には懐疑的、もしくは否定的な態度をとるのが、農民の一般的な傾性であった。大学で開発された新しい農業のやり方がいかにすぐれていようとも、彼らの関心

を喚起し、いわんやそれを受容してもらうとなれば、けっして容易なことではない。そのため、教育上の工夫が特別に求められてくる。実物教授（object lesson）が、それである。トウモロコシの収穫は、種によって二倍の差が生じることを、ピクニック・デーに参集した農民たちが学ぶようすを、ストックブリッジは次のように書き記している。[36]

春に実演農場で、畝ごとに、別々の農民が選択した種を植えてみる。しかし、数ヶ月後、畝によって生育状況は大きく異なる。その結果、スミスが播いたトウモロコシの方がはるかに収穫量は多い。この事実を目の当たりにして、ジョーンズの選択は正しくなかったという指摘を、参集した農民は受け容れる。こうした実物教授は、二重の意味で説得力を持つ。すなわち、優れた種の経済的価値を農民に納得させることはもとより、その実演農場は近くにあるので、播種されたトウモロコシの生育状況をつぶさに観察することができる。大学の紀要などで、収穫量の増加が期待できるといくら言われても、なにかごまかしがあるのではないかと思ってしまうものだが、その点、農民たちは、トウモロコシの育つさまを随時確認できるわけだから、無用の疑念を払拭するのに役立つ。

農学部が州内の農民のために展開する事業をこのように概観した後、農業経済学の教授ムーアから聞いた話として、ひとりの青年をめぐるエピソードを紹介している。その青年とは、ビーバーダム出身のクルーガーという名前の若者で、一〇年前に、ショートコースへの入学を申し出ている。[37]

当時、二三歳のクルーガーは、農業には関心をもっていなかった。彼は、生まれた農場を離れ、町に出て、働いていた。その後、父親が死に、ひとりになった母親は、彼にすがり、早く帰ってきて、抵当に入った土地をなんとかやり繰りすべく一緒に生活してしてほしいと頼んだ。彼は、二冬、ショートコースを受講し、持てる力をすべて農場の再興につぎ込んだ。ちなみに彼は、ショートコース卒業生による同窓会（Agricultural Experiment Associataion）の一期生のひとりである。負債は、とっくの昔に返却した。一九一一年に収穫した小麦は、翌年の春までに、一八〇〇〇ドル以上の値で売買することができた。数ヶ月前のこと、州知事のマクガバンは、彼を州農

業委員会の委員に任命している。

クルーガーの例は、農業拡張がひとりの人間に転機をもたらし、成功へと導いた典型的な事例といえよう。だが、農業拡張がウィスコンシン州の農業にもたらした恩恵はさらに大きかった。それを、ストックブリッジは、次のように要約している。[38]

州は、年間四〇万ドルを農業教育に支出し、何を得ているのだろうか。一九〇〇年から一九一〇年までの一〇年間に、ウィスコンシン州における農場の数は約六パーセント、総面積では一〇パーセント弱しか増加していないにもかかわらず、農業生産高は七四パーセントの増加をみている。この一〇年間に乳牛の数は四七パーセント増加し、バターの年間売上高は七〇パーセント上昇した。トウモロコシの一エーカーあたりの生産高の場合、一九〇〇年時点には全国平均の二五ブッシェルであったものが、一〇年後には三六ブッシェルに増大している。

農業拡張が、同州における農業と農民、そして農学部にとってもいかに大きな貢献をしてきたかが理解されよう。こうして農業拡張について語りつくすと、論旨は一変して、一般大学拡張に向かう。ヴァンハイス学長が高唱した高邁な州立大学理念をうけて、進展しつつある一般大学拡張を次のように語る。「これまでどの大学も実現することができなかった、すべての人びとにゼネラル・エデュケーションを提供しようというおそらく最大にして、もっとも包括的なスキームの責任者が、拡張部局の長レーバー（Reber, Louis E.）である。知りたいと思うことや、知らねばならないと思うことを、大学が直接に、あるいはグループの一員として教えることができないという人間は、州民二五〇万人の中には誰一人いないのである。おそらくこれに匹敵する試みは、世界のどこにもないだろう。[39]」「州全体を大学のキャンパスとみなし、州民のすべてを学生とみなす、ウイスコンシン大学の取組みにはじつに胸躍らされる。[40]」と称揚し、五種類の事業を挙げて、一般大学拡張の実際を紹介している。

そのひとつが、ミルウォーキー、オシュコシュ、ラクロスなどの工業地区に設置された拡張センターで開講される職業教育クラスである。近隣の工場で働く職工たちのために、経理、製図、機械学、金属の強度、ガス・エンジン、建築工学といった五七の実際的なクラスが、毎週または隔週開講されている。さらに、最近では、店主や小売商店主のために起業や販売術に関するクラスを新設した。

職業関連の教育は、通信教育によっても提供されている。実業、産業、電気、工学をはじめ、都市の基盤整備に資する土木工学や測量、ハイウェイ建設、農業などが、それである。無論、通信教育がカバーする分野は、じつに広範である。すなわちフランス語、イタリア語、スペイン語、ドイツ語、ラテン語、古代史、中世史、現代史、アメリカ史、ヨーロッパ史、家政、政治経済学、政治学、社会学、哲学、教育学、数学、英語、文学、細菌学、植物学、地質学、化学、天文学、法学、衛生学、音楽などのコースも通信教育によって提供されている。成功裏に学習が行われたなら、学士号に要する単位の半分を通信教育によって取得することが可能である。居ながらにして大学教育をうけることができるという利点から、いまや六〇〇〇人を上まわる人びとが通信教育課程に登録している。

クラス教育と通信教育の二つが、個人を対象に教育機会を提供することを意図した事業であるのにひきかえ、市民・ソーシャルセンター開発部や福祉・情報提供部が所管する事業は、地域の諸団体に教育や情報を提供することを通して地域連携を推進しようとするとことに特長がある。これら四種の事業に、州立図書館立法考査室や各種委員会における教授たちの専門的な指導助言活動を加えると、ストックブリッジが言うところの一般大学拡張事業は全容を現すことになる。

しかし、ストックブリッジの論考を読み直してみると、全一〇頁のうちの前半の七頁を農業拡張に充てている。言い換えるなら、一般大学拡張に関する記述は、最後のわずか三頁にすぎない。しかも、一般大学拡張の書き出しが興味深い。「大学は、農民に対すると同様に、都市および村の住民に教育サービスを提供しはじめている」[41]と述べているからである。ストックブリッジの主眼は、明らかに農業拡張にあった。しかも、それにとどまらず、先の一文に注

目するとき、農業拡張の延長線上に、一般大学拡張を位置づけていたことがわかるのである。

おわりに――同時代人に映ったウィスコンシン大学拡張――

スロッソンの論文は、「ウィスコンシン大学の規模とか所在を突き止めることは不可能である。」と、一見なんとも珍妙な文章で始まる。そして、次のように続ける。[42]（かりに答えても）大学の本部はマディソンにあり、そのキャンパスの広さは五六〇〇〇平方マイル、[43]と言うのがせいぜいである。他の州や、他の国々とはちがって、ウィスコンシン州のひとびとは皆、ウィスコンシン大学の学生としての資格を有しており、実際かなりの割合のものがいろいろな形で大学が提供する教育を受けている。そのコースの長さはどれくらいか、実験室はどこにあるのか、図書館にはどれくらいの蔵書があるのかといった簡単な質問にさえ、わかりやすく答えるのは無理である。

コースの長さがどのくらいか、簡明直截に説明できないのは、一〇日程度のものから一〇年に及ぶものまで、ウィスコンシン大学はじつに多様な教育を提供していることと関係する。また、学生たちが実験に使用する機械が動いているところが実験室であるとすれば、実験室は、構内にとどまらない。州内のいたるところに所在する工場そのものが実験室とみなされるからだ、と彼は言う。

こうした文言からして、ウィスコンシン大学が、伝統的な大学の観念からはずいぶんとかけ離れた大学であったことが推し量られるだろう。だが、キャンパスという閉じられた空間にはおさまりきらない大学と言ってみたところで、それは、ウィスコンシン大学を特徴づける事象のうちのほんの一断面にすぎないのだ。そこで、ウイスコンシン大学の特徴をもうすこし体系的に考察してみる必要がありそうだ。その際、中西部に位置するこの大学に特有な学問の発展のしかたに注目することは有効と思われる。

そもそもアメリカの大学がイギリス大学のカウンターパートであるかぎり、ギリシャ語、ラテン語、美文など、若

い紳士を養成するためのリベラルアーツが教育の中核をなしたのは不思議ではない。したがって新しく生成した学問を大学に導入しようとする試みは、根強く残る貴族主義との軋轢を経験することになる。保守主義者にしてみれば、新たな学問は「侵入者（intruder）」にほかならなかった。不承不承に認知したときでさえ、それらには、カレッジの「付属物（appendix）」としての位置しか与えなかった。ハーバード大学やエール大学のローレンス・サイエンティフィック・スクールとかシェフィールド・サイエンティフィック・スクールのように、わざわざ異なる命名法を用いたのは、そうした理由によるとことが大きい。

東部の由緒あるカレッジがイギリス大学を踏襲したように、西部の州立大学は、東部のカレッジをモデルにしてきた。ただし、そこでは、大学の存立基盤も文化的な風土も東部とはいちじるしく異なっていたから、西部の大学では科学を、たとえば農学や工学を最初からカリキュラムに加え、しかも有利な位置を与えた。[44]

さらに一九世紀の後半期に生成発展をみた学問に社会科学がある。スロッソンなどは、社会科学を、科学と人文学との中間に位置する学問ととらえ、厳密な科学の手法を人間の研究に応用することによって、両者のもっともよいところを併せもつと称揚しているほどである。[45] ウィスコンシン大学における社会科学の発展は、一八九二年、新進気鋭の学徒イリー（Ely, Richard T.）の赴任でもって始まる。世紀転換期における学生数をみると、学部段階では、学生の半分は文理学部、残る半分は工学部と農学部で構成される。ちなみに、この時期に大学院に在学した二五〇人についてみると、文系と理系に二分され、文系の半分は語学系、残る半分は歴史と政治学、また理系の場合には、三分の一が生物学、三分の二が自然科学に分かれる。[46] 新興の学問分野がウィスコンシン大学で積極的に受容され、定着をみたようすが窺い知れよう。

新興の分野を大学に取り込もうとする動向を学問の水平的な発展とすれば、もうひとつの方向としては、上方への発展、すなわち研究、純粋科学の推進を指摘しなくてはならない。地質学者でもあったヴァンハイゼ学長が、ことあるごとにドイツを先例に研究の重要性を強調したことはよく知られている。ステファンズの論考でも、ドイツの政治

家は、大学で生産された研究成果が国家にとっていかに必要かを熟知している、実際この半世紀の間にドイツが確固たる地位を築くことができたのは、ひとえに大学における研究の賜であると、ヴァンハイスの言が紹介されている。[47]さらに純粋科学について、ヴァンハイスが「いまや、リベラルエデュケーションを学ぼうとする科目のリストに純粋科学を含めることに疑義を呈するものは誰一人いない。[48]」と豪語したことに論及しているのをみると、筆者のステフェンズ自身、ヴァンハイスの純粋科学への傾倒ぶりを十分に理解していたことがうかがえよう。もっとも、ヴァンハイスが言うには、純粋科学は、「〝芸術のための芸術〟が美学にとっていかなる意味を持つかを学ぶのに重要である。」それは、「真理のために、（そして）どこに導かれようとも、ひたすら盲目的に知識を追求するために、さらに、社会的意義にはおかまいなく、抽象的な精神の世界で努力する専門家を育成するために」[49]純粋科学は必要であるといった主張とも通底するであろうから、ヴァンハイスの純粋科学に対する理解のしかは没価値的なものであったことがわかる。

だからといって、西部のひとびとが、純粋科学の発展を諸手をあげて歓迎していたわけではない。ヴァンハイス自身看破していたように、州民が求めたのは純粋科学ではなく、応用科学の方であった。[50]

一体どうしたら歴史の授業はおもしろくなるのかとストックブリッジが尋ねたところ、歴史学の教授チェイスは「われわれは、明後日に何が起きるのかという視点から歴史を教えているのだ」とすかさず答えたという。この挿話は、まさにウィスコンシンらしさを象徴的に物語っている。有用性とは一見無縁な歴史学にして、こうである。新設の経済学部がすぐさま繁栄と高い評価を勝ち得たのは、イリーをはじめとする新進気鋭の学者を招聘したことと無関係ではない。より正確を期して言うなら、彼らが、労働組合、税、企業、保険、公益事業等の生きた問題について自由に研究するための方途を拓いたからである。法学部や医学部のみならず、農学部とか工学部が開学時より設立されたのも、実業とか商業をはじめとするコースが矢継ぎ早に追加されていったのも、生活に関連した知識の生産と教育を求めるウィスコンシン州民の功利主義的な嗜好を抜きにしては正しく理解することはできないのである。

周知のごとく、伝統的なリベラルアーツ中心のカリキュラムに新たな分野を加える動向は、一九世紀後半にはすでに一般化していた。また、研究面ではジョンズホプキンス大学が先鞭をつけていたし、西部でも、アダムズ（Adams, Charles, Kendall）学長がミシガン大学で純粋科学の推進に努力を傾注していた。とすれば、ウィスコンシンらしさとは、在来の動向に応用科学の推進を加えた、つまり三方向で学問の発展を企図したところにある。こうした学問分野の進展を、ヴァンハイスを引用し、ステファンズは「拡大（expansion）」と呼び、ウィスコンシン大学の特徴とみなした。

だが、ウィスコンシン大学の実験は、構内の教育と研究活動にとどまってはいなかった。ウィスコンシン理念のもとに、大学当局は、構内に集積された知的、人的資源を積極果敢に学外に運び出し、すべからく州民にサービスしようとしたからである。それを、スロッソンは、「大学内での生活と大学のない生活とを分かつバリアを打破し、そしてすべての公的機関を一緒に機能させようというウィスコンシンの原理の論理的帰結」にほかならなかった。[51] ステファンズが「拡張（extension）」と呼ぶ事業が、これである。

大学拡張が、知の民主化に与っておおいに力をもったことは言うまでもない。だが、大学にしてみると、それは、功利主義的な学問の発展以上に、州民のサポートを勝ち取るのに有効な方途であった。[52] スロッソンは、ウィスコンシン大学における功利主義的な学問の発展に言及し、「大学をサポートしてくれる人びとに、みずからの有用性を気づかせる方法を開発するという点で、ウィスコンシン大学はたしかに秀でていた。」と述べている。実際、一連の大学拡張事業を契機に、州議会がいかに寛大な予算措置を大学に講じたかは、次の一節に示されている。[53]

大学は、みずからを役立てることによって、州民からの感謝と寛大なサポートという報酬を得ている。一九〇九年度の州議会は、七月一日からの二年間、約五〇万ドルを大学に支出する決定を下した。そのうちの七〇～八〇万ドルは、ミルタックスで賄われている。図書に対しては、年間五万ドルの特別補助金が、また建物に対しては、年間二〇万ドルが支出される。

ウィスコンシン大学をめぐるこの期の特徴についてはこれくらいにして、ふたたび、ハード、ステファンズ、ストックブリッジのウィスコンシン大学拡張評にもどろう。

三者の論考を読み比べてみると、同じくウイスコンシンの大学拡張を論じながら、そこにみられる異同は興味深いものがある。すなわち、ハードの論考は、なによりもまずマッカーシの立法考査室における活動に刮目し、また大学教師たちの専門委員会での活動について熱っぽく語っているところに特徴がある。大学教師の兼業については、ステファンズとストックブリッジも論及してはいるが、その扱いはハードの比ではない。いたって小さい。かわって、両者の論文では、農学部による構外教育事業と一般大学拡張とが中心をなしている。

ハードの興奮ぶりからして、一九〇七年時点では、立法および行政に、大学人がその専門性でもって貢献するという活動がいかに前代未聞の画期的な試みであったかが察せられる。そうした試みは、程なくして連邦議会においても採用され、全国に普及することになる。となれば、ウィスコンシン大学が先鞭をつけた実践の斬新さは、時間を経るにともなって徐々に薄れていったはずだ。ハードと後二者の論文で、取り上げ方に大きな差が生まれたのは、おそらくそうした事情と無関係ではないだろう。さらに付言すれば、ストックブリッジの論文では、大学による拡張教育のほかにも、市民団体に対する支援活動や、地域連携事業も取り上げられている。ここからは、一九一〇年代に入ると拡張事業が多様化し、市民の生活万般にわたって、大学がさまざまなサービスを提供しはじめたことを物語っている。

もうひとつ興味深いのは、一般大学拡張の捉え方である。従来の研究では、イギリス大学拡張がアメリカ合衆国に移入（一八八〇年代後半）されてより、全国に伝播し（一八九〇年代前半）、かつその一方で、衰退期（一八九〇年代～一九〇五年）を経験した後、ウィスコンシン大学において復活をみる（一九〇六年）までの一連のプロセスを、アメリカにおける大学拡張の成立過程とみなすのが通説であった。しかし、ステファンズにしても、ストックブリッジやスロッソンにしても、そうした見解をとってはいない。

ステファンズを例にとれば、イギリスから移入された大学拡張とその後の動向について次のように述べている。(54)

一昔前に大学を卒業した人なら、カレッジに行くことができない人びとに大学の機会を拡張しようというアイデアが八〇年代にイギリスから移入されたことを思い出すだろう。それは、一時的な流行であった。目的は、教育ではなくて、「教養」にあった。問題などを解かせるというやり方ではなくて、講義という方法が用いられた。拡張コースでは、人びとが学びたいことではなくて、人びとが知るべきことでもって課業が構成されていた。この外来種は、なんとか軌道に乗ったシカゴは例外として、定着をみることはなかった。しかし、聞くところでは、いまや、シカゴでも調子がよくないようだ。

イギリス大学拡張を踏襲した初期の実践に対するステファンズの視線はきわめて冷ややかである。したがって、ほぼ同時期に、ウィスコンシン大学農学部がやがて創始することになるショートコースについて、関係者が談義したいきさつを語るときの温度差はよけいに際だつ。すなわち、マディソンの郵便局長で、州立大学の理事、しかもウィスコンシンの政治ボスであったキース、農学部長のヘンリーらが、ヴィラス上院議員の屋敷に集い、農民のためのショートコース開設の可否をめぐって議論を交わしたのは、折しも「『大学拡張』が外国からやってきた時であった」[55]とわざわざ念を押したばかりか、そうした動きを、イギリスから移植した大学拡張に対峙させ、ウィスコンシン州では、「本物（real thing）が自然な形で生まれつつあった。」（傍点筆者）と強調しているのである。[56]そこには、借り物ではなく、まさに州民が求めるものに応えようとした大学の企図を称える心情が吐露されている。さらに、農業拡張の実績をふまえた上で、「これまで、農民やその妻たち、子どもたちのためにやってきたことを、これからは、職工、工場主、教師、牧師、その他あらゆる男女や子どもたちのために為すべく、われわれは行動すべきだ。」と公言したヴァンハイス学長の言を引用した下りを読むと、ステファンズは、一般大学拡張を、イギリス大学拡張の系譜ではなく、農業拡張の延長線上に位置づけていたことがわかる。

ストックブリッジも、しかり。「大学は、農民に対すると同様に、都市および村の住民に教育サービスを提供する」

ことを意図して、大学拡張に着手したと書き記しているところをみると、彼もまた、ステファンズとほぼ同様の見解をとっていることがわかる。

イギリスで誕生をみた大学拡張は、アメリカに移植されたが、ニーズや文化になじまず、絶えてしまった。現前する大学拡張は、農学部による構外教育の発展形態として生成してきたと唱える。言ってみれば、イギリス大学拡張とは異種の、もともとアメリカに自生する株から繁茂してきたとする、二元論の立場に立つ。

そうした方向は、スロッソンにおいて、なおいっそう明快に示される。少々長くなるが、関連する記述を引用すると、次のようである。(57)

州民は、農学部が農民のために行ってきたさまざまな事業について多かれすくなかれ精通している。したがって、大学拡張が発展し、目指す新しい領域へとさらなる関心が向けられる。農民のために多くの実績を上げてきたので、ウィスコンシン大学はその関心を職工に向けつつある。モリル法は、メカニック・アートの教育を農業教育と同等に考えたが、それら二つの分野の発展は、驚くほどちがっていた。農民たちへの啓発活動は精力的、かつ巧妙に行われたが、実際に、構内に住まい、正課教育を受ける学生は、農学部の場合多くはない。他方、機械学と工学の教育は、四年制の課程に入学した正規の学生に対して行われてきた。それだけに、工場の従業員のために何かをしようと考えるものは誰一人いなかった。この分野は、明らかに、長いこと無視されてきた。（中略）要求の一部は民間の通信学校によって充足されてきたが、けっして満足のいくものではなかった。なぜなら、入学し、授業料を払ってしまえば、学生が添削してもらう解答を送るのを止めるのが早ければ、それだけ通信学校にとっては好都合であったからだ。毎月、一万ドルがウィスコンシン州から東部の通信学校に流出していた計算になる。大学は、職業教育に着手することを決めたとき、通信教育という方法に拘泥してはいなかった。一九〇八年に、その事業を創始するにあたって、大学は、ミルウォーキー市内の八つの大きな工場にクラスを開設した。受講生二六三人という数字は、全従業員の一〇分の一以上がクラスに参加したことになる。（中略）同年、ファーマーズ・インスティチュートに

類似した、ベーカーズ・インスティチュートを開始すると、小麦と小麦粉の専門化、食品化学者、細菌学者、パン屋を営んでいる人びとが参加した。そうした事業への期待がいかに高いかは、ミルウォーキー商工業者組合が、来年度の拡張事業に五万ドル、その翌年には七万五千ドルの補助金支出を決めたことで推し量られるだろう。

ここには、ミルウォーキー地区の工場内で従業員のために職業教育を実施するクラスを開設したことやそれらクラスの盛況ぶり、あるいはパン製造業者のためにインスティチュートを実施したことなどがしたためられている。それをみるかぎり、スロッソンは、イギリス大学拡張による影響などみじんも斟酌してはいない。それどころか、ファーマーズ・インスティチュートやショートコースなど農民のために実施してきた教育と、職工やパン製造業者など都市に住む人びとのために新たに着手した職業教育の意義や根拠を、モリル法まで遡及して論じている点に注目すべきである。彼の言うところにしたがえば、農業には後れをとったものの、メカニックアートの分野での教育は、一般大学拡張によって、ついに進展をみることになった、つまり、モリル法の精神は、ここにきてようやく具現されようとしているというわけだ。

いずれにしても、イギリス大学拡張を淵源とする系譜に位置づけるのでなく、現前する大学拡張の成立をアメリカに固有の伝統と文化的風土のなかで捉えようとした点で、三者は共通する。それを、他国からの借り物と言われるのを潔しとせず、あくまで、アメリカ人による努力の賜と考えようとする同時代人の身贔屓と片づけてしまうこともできなくはない。しかし、それでもなお、同時代人がそのように考えていたということを事実として受けとめることは、依然として大事である。考えてみれば、他国の文化を一方的に受容する過程を跡づけることが、文化交流史の研究ではない。互いに否定し、反駁し、せめぎあうさまにこそ、文化交流の実相があるといっても過言ではないだろう。だからこそ、ウィスコンシン大学拡張を目の当たりにした同時代人の思惟は、文化交流史研究の視座をわれわれにあらためて提示してくれるとともに、これまでのアメリカ大学拡張史像に対しては、みずからへの反省をこめて言うので

あるが、イギリス大学拡張の後裔として、ともすれば直線的に、またあまりにも単純化して論じるきらいはなかったかと、一石を投じているように思えてならないのである。

注

（1）新堀通也編著『学問の社会学』東信堂　一九八四年　一二―一三頁。

（2）大学拡張（university extension）は、イギリスに淵源を有し、大学が、民衆に高等教育を提供しようという意図をもって行う事業のことをさす。しかし、アメリカ合衆国の場合、モリル法をもとにして設立された農学部が農民を対象に行う構外教育、つまり農業拡張（agricultural extension）が一八八〇年代に成立するにおよんで、それと区別する意味から、大学拡張を「一般大学拡張（general university extension）」と呼ぶこともある。本稿では、農業拡張と区別する必要がある場合にかぎって「一般大学拡張」というタームを用いたが、それ以外の場合には「大学拡張」と表記している。

なお、一九一五年に結成された全米大学拡張協会は、ウィスコンシン大学に敬意を表して、その第一回大会をウィスコンシン大学において開催している

（3）ウイスコンシン大学関係者がウィスコンシン大学拡張を論じた単行本および論文のうち、いま手元にあるものを列挙してみると、以下のようである。しかし、本稿の意図に照らして、これらは、今回の分析対象からは外した。

Howe, Frederic C., *Wisconsin: an Experiment in Democracy*, Charles Scribner's Sons, 1912.

McCarthy, Charlse, *The Wisconsin Idea*, The Macmillan Company, 1912.

Fitzpatric, Edward A. *McCarthy of Wisconsin*, Columbia University Press, 1944.

Doan, Edward N., *The LaFollettes and the Wisconsin Idea*, Rinehart & companay, Inc., 1947.

Univeristy Extension in Wisconsin 1906–1956: The 50-Year Story of the Wisconsin Idea in Education, University Extensinn Division, The University of Wisconin, 1956.

Rosentreter, Frederick M. The Boundaries of the Campus, The University of Wisconsin Press, 1957.

Schlabach, Theron *F., Edwin E. Witte: Cautious Reformer*, State Historical Society of Wisconsin, 1969.

Curti, Merle & Carsternsen, Vernon, The University of Wisconsin: A History 1848-1925. The University of Wisconsin Press, 1994.

Myers, R. David, "The Wisconsin Idea: Its National and International significance," *Wisconsin Academy Review*, vol.37, No.4 (Fall, 1991)

Stark, Jack, *The Wsiconsin Idea: The University's Service to the State*, Wisconsin Blue Book 1995-1996, no date.

"Wisconsin's Big Idea: the Story of University os Wisconsin Extension as told in the Milwarukee Journal", no date.

(4) Hard, William, "A University in Public Life", Outlook, 86 (July 21, 1907), pp.658-657.

ハードの略歴に言及しておくと、彼は、著述家。シカゴ・トリビューンやリーダーズ・ダイジェストの編集にもかかわる。著書には、『The Women of Tommorow』(一九一一年)、『Raymond Robins' Story of Bolshevist Russia』(一九一九年)、『Who's Hoover?』(一九二八年) などがある。

(5) Steffens, Lincoln, "Sending the State to Collge", *American Magazine*, 67 (Februagy, 1909) .

同論文のタイトルには、「The University That Reaches Anybody, Anytime, Anyhow」、「What the University of Wisconsin Is Doing for Its People」という二つの文章が付記されている。

同論文は、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのいわゆる世紀転換期に発表された大学論を、後にストーンらが集録編集した下記の文献にも収められている。

Stone, James C. and DeNevi, Donald P., compiled, *Portraits of the American University 1890-1910*, Jossey-Bass Inc., Publishers, 1971.

ステファンズは、著述家、講演者として知られる。ニューヨーク・イブニング・ポストのレポーター、ニューヨーク・コマーシャル・アドバタイザーのローカル記事編集長などを歴任。著書には、『The Shame of the Cities』(一九〇四年)、『The Struggle for Self-Government』(一九〇六年)、『Upbuilders』(一九〇九年)、『The Autobiography of Lincoln Steffens』(一九三一年)、『Boy on Horseback』(一九三五年) などがある。

(6) Stockbridgy, Frank Parker, "A University That Runs a State", *The World's Work*, 25 (April, 1913) .

ストックブリッジは、作家、ジャーナリスト。バッファロー・イクスプレスの論説委員、アメリカン・ホーム・マガジンの創設者・編集長、ニューヨーク・アメリカンの記者、ニューヨーク・グローブの論説委員、ニューヨーク・ヘラルドの記者をはじめ、シンシナティ・タイムス・スター、タウン・ディベロップメント・マガジン、ポピュラー・メカニクス、オールド・コロニー・マガジンの編集長などを歴任。著書としては、『The School of Tomorrow』（一九一一）、『Yankee Ingenuity in the War』（一九一九）、『Measure Your Mind』（一九二〇）、『Florida in the Making』（一九二五）、『The New Capitalism』（一九二六）、『So This Is Florida』（一九三八）、『Hedging Against Inflation』（一九三九）などが知られる。

(7) Slosson, Edwin E., Great American Universities, the Macmillan Company, 1910.

人名録には、スロッソンは編集者として記されている。インディペンデントの編集長、コロンビア・スクール・オブ・ジャーナリズムの準会員、サイエンス・サービスのディレクターなどを経験。著書には、『Great American Universities』（一九一〇年）、『Major Prophets of Today』（一九一四年）、『Easy Lessons in Einstein』（一九二〇年）、『The american Spirit in Education』（一九二一年）、『Plots and Personalities』（一九二二年）、『Chats on Science』（一九二三年）、『Sermons of a Chemist』（一九二五年）などがある。

(8) ちなみに一四の主要な大学は、ハーバード大学、イエール大学、プリンストン大学、スタンフォード大学、カリフォルニア大学、ミシガン大学、ウィスコンシン大学、ミネソタ大学、イリノイ大学、コーネル大学、ペンシルベニア大学、ジョンズホプキンス大学、シカゴ大学、コロンビア大学からなる。

(9) Hard, William, “A University in Public Life”, *Outlook*, 86（July 21, 1907）, p.659.

(10) Ibid., p.660.

(11) Ibid.

(12) Ibid., p.662.

(13) Ibid., p.663.

(14) ハードの意図は、その論稿の表題に示されるように、ウィスコンシン大学のいかに多くの教師たちが、積極果敢に構外に出向き、専門性を発揮することで、いかに州民の生活の改善に寄与しているかを描写することにあった。し

たがって、「大学拡張」というタームは、「大学拡張といっても、この風変わりな事業種」(this extraordinary species of university extension) と述べたくだりで一回使用しているだけである。Ibid.,p.662.

ウィスコンシン大学の教師たちが州議会等の各種委員会に名前を連ね、その専門性でもって社会に貢献していることは、マッカーシー (McCarthy, C) が、『Wisconsin Idea』で詳述している。しかし、同大学の教師たちが参画した委員会の全容は示していない。それら委員会名は、スロッソンが自著『Great American Universities』において列挙しているので、ここに紹介しておく。

State geological and Natural History Survey, Free Library Commission, State forestry Commission, conservation commission, Satet Fish commission, State Fark Board, State Board of Health, State board of Control, State Tuberculosis Sanitatium, State History Commission, State Live Stock and Sanitary Board, State Hygienic Laboratory, State railroad Commission, State Board of Assessment, State Sealer of Weights and Measures, State Butter Makers' Association., State Board of Agriculture, United States Reclamation Service , United States Geological Survey, Legislative Reference Library, United States Conservation Commission.

Slosson, E. E., *Great American Universities*, The Macmillan Companay, 1910, pp.214-2125.

(15) Ibid., p.665.

(16) Ibid., p.667.

(17) Ibid.

(18) このガイガーが誰であるのか、独米の名士録、著作者事典を調べてみたが、特定できなかった。国内の蔵書検索でも、それらしいものは見当たらなかった。そこで、アメリカ合衆国の国会図書館にアクセスして「Geiger」と「Humanismus」をキーワードにして検索を試みたところ、Geiger, Ludwig, *Renaissance und Humanismus in Italien und Deutschland* (一八八二) が一件だけヒットした。したがって、ステフェンズの論文に登場するガイガーとは、L・ガイガー (一八四八－一九一九) で、書名の『フマニスムス』とは『イタリアとドイツにおけるルネッサンスと人文主義』をさすと考えてよさそうだ。

(19) Steffens, L., op. cit., p.118.

(20) ステファンズは、ヴァンハイスが、ある講演の中で、アメリカ大学の発展方向を expansion と extension の二つの概念でもって論じたと述べている（Steffenss. L. op. cit., p.119）。しかし、その講演がいかなる演題で、どこで行われたものであるかを、筆者は、現時点では確認するにいたっていない。

(21) Steffens. L., op. cit., p.121.

(22) Ibid.

(23) Ibid., p.122.

(24) Ibid.

(25) ステファンズは、論文のなかで、ファーマーズ・インスティチュートについて次のように述べている。

「すべての農民に手をさしのべるために、ファーマーズ・インスティチュートが創始された。ある種の「四つ辻組織（a sort of Four Corners organization）」とも言うべきインスティチュートは、西部、中西部に広く普及しつつある。農民にとって生活の拠点となるタウンや村、辻にできた集落が選定され、近隣の住民たちがそこでインスティチュートを組織する。インスティチュートでは、大学からやってきた教授たち、教養ある農民、その他専門家たちが、二日ないし五日間にわたり、実例を引いたり、実演を併用しながら、講義を提供する。その後、畑に赴いて、農民からの質問に応じる。大学からやってきた教授たちは、農民たちとの交流を通して、彼らのニーズを把握し、それを大学に持ち帰る。大学は、そうして得た情報をもとに、講師の人選を行う。なお、いずれのインスティチュートでも、科学一般に関するニュースと農業の進歩について報告することになっている。（中略）農民や酪農家たちは、疑り深く、せっかちである。・・・・・問題は、成人教育に関係しているのだ。少年は、なんでもすぐに学ぶが、彼らの父親たちは、ゆっくりである。しかも、彼らの場合、すすんで学びたいという気にさせなければ、学習は、そこで中断してしまう。」Ibid.,p.126.

(26) Ibid., pp.127-128.

(27) Ibid., p.129

(28) Ibid., p.128.

(29) Ibid., p.132.

(30) Ibid., p.133.
(31) Ibid.
(32) Stockbridgy, Frank Parker, "A University That Runs a State", *The World's Work*, 25 (April, 1913), p.707.
(33) Ibid., pp.702–703.
(34) Ibid., pp.703–704.
(35) Ibid., p.704.
(36) Ibid., p.705.
(37) Ibid., p.706.
(38) Ibid.
(39) Ibid.
(40) Ibid.
(41) Ibid.
(42) Slosson, E. E., *Great American Universities*, The Macmillan Companay, 1910, p.210
(43) 五六〇〇〇平方マイルとは、四方を壁で囲まれた大学構内のことではない。それは、ウィスコンシン州の広さを含意することに注意する必要がある。
(44) Steffens, L., op. cit., p.120.
(45) Slosson, E. E., op. cit., p.220.
(46) Ibid., pp.119–7120.
(47) Steffens, L., op. cit., p.120.
(48) Ibid.
(49) Ibid.
(50) Ibid., p.121.
(51) Slosson, E. E., op. cit., p.241.

(52) Ibid., p.219.
(53) Ibid., p.242.
(54) Steffens, L., p.121.
(55) Ibid.
(56) Ibid.
(57) Slosson, E. E., pp.240-7241.